

Ashi

Vol.82
最終号

70年の歴史を未来へ

葦

人間は「自然のうちで最も弱い一本の葦にすぎない。しかしそれは考える葦である」として、人間の、自然の中における存在としてのか弱さと、思考する存在としての偉大さを言い表したもの。

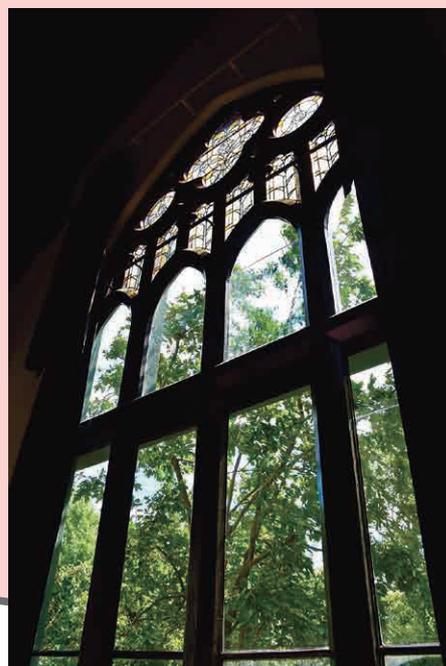
日本女子大学 新泉山館（東京都文京区）

解散に至るまで ～2年間の出来事～

葦81号で会員の皆様に教育学科の会の存続の危機を訴えて、「存続に向けて、現状やれることは全部やる」との改革への決意と、デジタル化促進のためのメールアドレス登録などのご協力をお願いしてから1年3ヶ月。2024年3月31日をもって、教育学科の会は72年の歴史に幕を下ろしました。昨年秋の臨時総会では、卒業生理事一同で当会の解散を提案させていただき、賛成多数でご承認いただきました。会員の皆様には、この苦渋の決断にご理解いただいたことに感謝いたしますと共に、皆様の心のふるさとして本会をそのままの形で次代につなげることが叶わなかったことを、あらためて深くお詫びいたします。

以下に、臨時総会での審議の抜粋に補足説明を加えたものをQ&A方式でまとめました。詳細については、日本女子大学教育学科の会HP内の「解散に至るまで」をご覧ください。審議中のやり取りの大部分を、議事録として公開しております。

※こちらのQRコードからアクセスできます →



▲成瀬講堂

理事会への疑問 Q&A

Q 4つの解散理由 ①理事会運営、②後継問題、③名簿問題、④会費問題とは？

A ①【理事会運営】2023年度の学生委員が決まらず、卒業生、学科教員、学生の代表からなる本理事会の構成メンバーから、学生が抜ける事態に。

②【後継問題】回生委員会の活動が衰退して行くと共に、理事の定員割れと後継者不在が続き、実務担当の理事の多くは自分の業務の全てをひとりで担い、10年20年の長期在任に耐えてきた。

③【名簿問題】2022年度から、個人情報情報の厳格化やコンプライアンスの徹底に配慮したやむを得ない措置として、学科は新生の学生会員入会と、新卒生の本会員移行の任意性を明確にした。その結果、本会は2年前から新卒生名簿を学科から入手できなくな

り、同窓会組織としての将来が事実上閉ざされた。

④【会費問題】既存卒業生の会費納入者の高齢化が進む一方、卒業翌年～卒業後40年までの各回生の納入者は0～数人。学生会費についても、一昨年の新卒生の入会（懸命なキャンペーン活動にもかかわらず）8名。昨年の新入生については、前年度に学科や法律専門家とのワーキンググループで何度も協議を重ね、会費を半額とした。けれども学科会議で学生の会費徴収に対する統一した方針が決まらないまま、昨年度の前期授業日程が終了し、徴収の時機を逸した。

以上のような状況を踏まえて、2023年9月、卒業生理事一同は本会を現体制のまま存続させるのはもはや限界であると判断し、状況の更なる悪化を避けるために昨年度の既卒会員の会費の徴収も取りやめて、解散の提案を行う決断に至った。

Q 学科会議でなかなか方針が決まらなかったとのことだが、その理由とは？

A 2022年5月から、本理事会及び卒業生理事達は、理事会メンバーのひとりの先生と一部の学生委員から、学生の入会及び会費納入の方法や用途に対して、メールによる厳しい批判を受けた。コロナ禍や学科の目白移転で学生行事が行えなかったのに、会費を前納している学生に対して迅速で適切な対応がなかなか取れなかったことが直接の原因と思われる。学生の主張にはもっともな部分も多かったが、入会時の手続きや会費の徴収方法などは、学科が長年の事務手続き上の慣行として実施してきて卒業生理事側は関知していないことも多かった。また会則から変えなければどうにもなら

ない制度上の問題もあった。けれども理事会での事実確認や学生と直接話し合うなどの機会は得られないまま、教育学科の会批判は学科内に広がって行った。一昨年度後期には、当時の学科長や新たに選任された会長及び理事の先生によって様々な事態の收拾策が取られた。昨年度の初めには本会を支えて行くとの決議が学科会議で出て、研究室理事の先生方によるサポート体制もとられた。だが、その後も学生や学科の中で本会をめぐるの分断が続いていた。そんな中での昨年度の学科会議だったが、①学生からの会費徴収自体への疑問や危惧。②学科の会に反感を持つ前述の先生の発言で会議が膠着。③大学の体制の変換期で、学科の存続をかけた重要審議事項が山積していた。などの事情で、意見統一が難しかった。(卒業生理事側の動きについては、P.6に記載)

Q ①せめて卒業生だけの縦の会として存続させることは考えなかったのか。②費用のかかる名簿を独自に持たなくても、桜楓会から宛名ラベルを買えば葦の発行はできるはず。③人手が足りなければ、ボランティアを募るとか、④同窓会専門の外部業者に委託するとか、継続させるための何らかの手段はあったのでは？

A ①縦の会のみ継続は当然考えた。会計の見直しやデジタル化推進は、その点も視野に入れての対策だった。だが一般会員の関心を喚起するには至らなかった。

②葦を発行するには会費収入が必要なので、それを管理する独自の名簿は必要だ。現在のクラウド型名簿管理システム=CRMは単に名前や住所の保管だけでなく、会費の支払い状況やホームページの会員情報の登録・変更ページとも連動している。また、葦の発送も本会のクラウドから発送会社のクラウドに、情報を外に出さずに送るこ

とができる。それを昔のように紙や個人のパソコンで管理するのは、大変な手間であるだけでなく、今の時代のセキュリティの考え方からすると非常に問題だ。会費のコンビニ収納もメールでの情報配信も、独自のCRMがないとできなくなる。

③ボランティアのなり手も、前回の葦で本会の危機を訴えて募集をしたが、応募は5~6名で実際に応じてくれたのはごく僅かだった。理事に至っては、更になり手はいないだろう。会員のライフスタイルも考え方も変化している。

④同窓会専門の外部業者委託については、何社かの担当者に詳しい説明を受けたが、導入可能な料金の業者は紙の会報誌をカットして全てデジタル化しているから安い。長年会費を納入して本会を支えてくださっていた60代前後から80代の会員の多くには、依然として葦の送付以外の情報発信手段がない。またメールアドレス登録者でも高比率で紙の葦を希望することから、本会の実態と合わない。

以上のような理由から、卒業生だけの縦の会としての存続も、それを継続して担う人材も資金も方法もない状態では先が見えていないとの結論に達した。

Q 今後、私たちの名簿や、学科とのつながりはどうなるのか？

A 現在のCRM提供会社のゾーホジャパンは、2023年の途中から方針が変わり、仲介会社を通さずに親会社との直接契約が容易な仕組みになった。本会的にも、デジタル担当理事の加入で仲介会社にサポートを受ける必要がなくなったので、今年度は親会社との直接契約に切り替えた。これで使用料は十分の一近くまで削減された。そこを踏まえて、様々な部分で立ち行かなくなった今の体制は解散という形で一度リセットし、分断を生んだ4年分前納の学生会費を学生に返却する。そしてその残余資金で学科がCRMやホームページを引き継いで、直接卒業生にボランティアを募りセミナーなどを一緒に行く。そうすれば、卒業生、学科、学生で学び合うという本会の伝統だけは、当面の間は残るのではと考え、学科に提案した。ありがたいことに、学科もその方向でバトンを受け継いでくださることになった。そこを新たなスタートにして、今の時代に即した、三者の新しい交流の仕組みが生まれることを心から祈念している。

日本女子大学教育学科の会 令和5年度副会長 櫻井 慶子(29回生)



日本女子大学教育学科の会 令和5年度会計決算書(令和5年5月1日～令和6年3月31日)及び清算事務報告書
令和5(2023)年度会計決算

令和5年10月7日に開催された臨時総会で、当会は令和5年度をもって解散することが可決されました。それに伴い、清算終了における会計決算を下記のように報告いたします。

今年度における特殊事項

- ・令和5年5月1日から令和6年3月31日までの収入総額は、今年度会費徴収を取りやめたため、寄付金112,000円のみである。
- ・令和4年度卒業生会費納入者8名の会費24,000円の返金等の手続きは教育学科に引き継ぐ。
- ・未払金は、決算時点で「草」発行発送費用のみであり、清算後は金0円である。
「草」発送時に生じる可能性がある郵送費値上げ等の差額は、委託業者日本通信紙㈱が負担する。
- ・残余資金額は、金510,020円である。解散後は卒業生名簿管理システムやHP運営等の継続費用として、全額を教育学科に移譲する。

収入の部

項目	金額	摘要
繰越金	3,552,507	
会費	36,000	新卒業生(令和4年度)会費3,000円×8人=24,000円 卒業生会費3,000円×4人=12,000円
寄付	112,000	匿名寄付+早期振込み納入者のうち会費返却辞退者4名分
受取利息	87	ゆうちょ2円 みずほ13円 ゆうちょ定期72円
収入の部合計	3,700,594	

支出の部

項目	金額	摘要
会報費関連費	908,371	日本通信紙㈱
印刷発送費	646,778	章+封筒 印刷・発送作業費
送料	261,593	郵便料金 3,385件×84円×92%=261,593円
人間研究関連費	76,560	相模プリント㈱
印刷費	76,560	当会会員用分担金 120部 単価580円×120部=69,600円(税込76,560円)
送料	0	本来は希望する会費納入会員に無料送付 今年度は会費未徴収に伴い、学科により「散会の集い」参加者に記念品として配布 その他希望者には送料本人負担で学科に申込みに変更
各種データ関連費	41,184	ゾーホージャパン㈱との直接契約により、前年度より利用料が大幅削減
名簿データ管理費	41,184	令和6年1月までの年間利用料36,432円+メルマガオプション料4,752円
ホームページ運営費	71,500	ピクセリウム㈱
管理費	66,000	HP管理会社年間保守管理費(令和6年1月まで 月額5,500×12ヶ月=66,000円)
修正費	5,500	解散関連ページ増設費
行事運営費	795,692	
大会(学緑のつどい)	21,380	登壇者謝礼10,000円×2人 他
臨時総会運営費	746,779	臨時総会お知らせ印刷郵送費707,361円 日本通信紙㈱ 委任状返送者宛解散報告ハガキ印刷郵送代36,468円 ㈱アーツ 会場参加者飲み物代2,950円
WEBセミナー	27,533	懇話会に変わり、zoomによるWEBセミナーを4回実施。 講師謝礼は講師4名謝礼辞退のため2名分21,000円 学内配布チラシ代ラクスル㈱4,090円/2,443円
理事会運営費	82,176	
会議費	22,110	zoom年間利用料
活動費	60,066	行事参加交通費 資料印刷費 郵送費 他
委員会費	19,221	
研究室委員会	13,408	文具費 研究室理事活動費 他
回生委員会	5,813	回生委員への名簿返却方法通知ラクスル㈱
奨励賞	60,000	令和4年度奨励賞受賞者2名への奨励金 6月の総会で授与のため、当年度経費として計上
卒業生記念品	12,100	令和5年度卒業生へ桜楓会ボールペン 100円×110人=11,000円(税込み12,100円)
会費返金	1,116,000	
卒業生会費返金	12,000	早期振込み納入者のうち4名に会費返却
学生会費返却費	1,104,000	入学時に4年前納の学生会費を返却(学科が手渡しにて返却) 1年生:徴収なし 2年生(3年分):6,000円×94人=564,000円 3年生(2年分):4,000円×90人=360,000円 4年生(1年分):2,000円×90人=180,000円
振込手数料	7,770	振込み手数料年間合計額 ゆうちょ5,580円 みずほ2,190円
支出の部合計	3,190,574	

収支差額

令和5年度収支差額	510,020	事務処理・システム継続費として全額を教育学科に移譲
-----------	---------	---------------------------

令和6年3月31日

上記のとおり報告いたします。

教育学科の会 会長 田部 俊充
副会長 櫻井 慶子
会計 天野 正子

上記について慎重に監査した結果いずれも適正かつ妥当なものと認めます。

監事 杉山 京子
監事 吉賀 眞理子

今までとこれからの卒業生とのつながり

教育学科の会会長・教育学科教授 田部 俊充

2023年10月7日に教育学科の会臨時総会を開催させていただきました。ここで、教育学科の会を現体制のまま存続させることは困難で、2024年3月31日をもって解散させていただく、という提案を承認していただきました。

私も教育学科の理事、卒業生の理事の皆様も、伝統ある教育学科の会を解散に向かわせて良いのか、罪悪感に悩まされながらも検討を重ねました。これからの教育学科と卒業生の方々との望ましいつながりを考えて、教育学科とも問題を共有し、様々な解決策を検討し、2023年度はWEBセミナーを開催するなど必死に解決の糸口を探してきましたが、難しいという判断し、状況が悪化する前に解散という決定が最善である、という結論となりました。

会員の皆様には、このような事態に至ったことに心よりお詫び申し上げます。

詳細は機会があったら別の機会に述べさせていただきたいのですが、財政的にも立ち行かなくなることが目に見えており、最悪のシナリオを迎える前に理事が一致して下した決定へのご理解を賜れば幸いです。今も、これで良かったのかという煩悶の日々です。理事の皆様も同じだと思います。

今までとこれからのつながりとして、今までに多くの卒業論文、修士論文の指導を行い、6名の方の教育学専攻の博士論文の主査をさせていただきました。学生や大学院生のみなさんの研究から非常に刺激を受けるとともに、私自身もまだまだ新しい研究への好奇心、研究の質を高める意欲を持ち続けたいです。また卒業生の方とは社会科の授業やカリキュラの検討でつながっているネットワークがあります。微力ではありますが、これからも卒業生・修了生の皆様と力を合わせて働かせていただきます。

今後ともどうぞよろしく願いたします。

散会によせて

教育学科長・教育学科教授 清水 睦美

本学赴任の際に、回生委員会で自分自身の研究についてお話させていただいた時の光景が、今でも記憶に残っています。同窓という関係を超えた学びを求める者たちの集いの場を、卒業生たちがとても大切にしていなくていいと深く印象づけられた出来事でした。教育学科の会は2023年度で散会となりましたが、受け継がれてきた伝統をこれからも紡いでいく任務が、学科教員には課せられたと感じています。『人間研究』の発行、ホームカミングデイでのイベント、ホームページ等を通して、情報発信をしていきたいと思っておりますので、今後とも末永く教育学科に関心を寄せていただきたく願いたします。

大学と卒業生との関係のこれから

研究室委員会・教育学科教授 藤田 武志

大学が在學生に学びの機会を提供するのはもちろんですが、卒業生にとっても学びの機会となるようなものを設定していけるというように思います。そしてそれが、在學生と卒業生をもつなぐようなものだったらなおいいでしょう。

卒業生の経験を在學生に話していただく機会を設けるのはその一つですが、聴衆は在學生だけでなくもいいかもしれません。たとえば、子育て経験やキャリアチェンジの経験、外国での滞在経験や病気の経験など、さまざまな経験を語っていただき、それを在學生だけでなく卒業生も聞くことができれば、教育学科に集ったさまざまな年代の仲間たちがお互いに学び合う機会となるかもしれません。

もちろんそれ以外のやり方でもいいですが、今後も教育学科がハブとなって、みなさんがつながりあう仕組みを作っていけるよう努力したいと思います。

この1年で感じたこと

研究室委員会・教育学科准教授 桑嶋 晋平

昨年の秋、ふとおもいたって、学生時代をすごしたキャンパスや下宿の周辺を歩いてみた。いくつかのお店や建物はなくなっていたけれど、住んでいたアパートや、長い時間をすごした研究棟はそのままでのこっていた。あまりいい思い出もないので、卒業後は用でもないかぎり訪れることはなかったのだが、時間がたつて多少やわらいだよう、いろいろなことをかんがえながら歩いた。

これまで、学部・大学院とながらく大学にいたけれども、同窓会や縦の会の類にはかかわったことがなく、教育学科の会の理事というかたちではじめてかかわることになった。着任早々ということもあり、いろいろと不手際もおおく、理事や会員のみなさまには多大な迷惑をかけた。申し訳ない次第である。

この1年間、つどいやセミナーの開催、総会の開催などにかかわり、その都度、卒業後のつながりや学科と卒業生とのつながりの大切さをかんじてきた。昨年の秋にふとおもいたった背景には、——そのときはあまり意識していなかったけれど——教育学科の会での経験があったのだとおもう。

散会のつどいの申し込みを整理していたとき、「帰る場所がなくなるようで残念だ」と書かれたはがきを目にし、とても心苦しかった。大学は、ふとおもいたったときに訪れることができ、いつでも帰ることのできる場所であるはずだし、そうあるべきだろう。教育学科の教員として、この大学がそのような場所であるようにつとめていきたいとおもう。

『人間研究』のご案内

今後の『人間研究』の送付について

- 第60号の送付を申し込みいただいた方には、継続して送付いたします。
- 新規の送付希望は、はがきもしくはホームページから申し込みください(着払い)。

はがきの送付先

〒112-0015 東京都文京区目白台1-19-10 新泉山館3F
日本女子大学教育学科『人間研究』担当
(電話での問い合わせはご遠慮ください)

「散会のつどい」報告

報告 吉賀 真理子(30回生) 松尾 里羽子(31回生)

去る2024年3月23日13時30分～16時、新泉山館において、教育学科の会「散会のつどい」が行われました。

当日は3月下旬とは思えない、なごり雪が降ろうかと思われるほど寒い日ではありましたが、学科の先生方、現OG理事他、およそ65名の方が参加されました。そのうち、22名の方はリモート参加となりましたが、皆さん、閉会の時を見守ってくださいました。

式では、会長の田部先生、学科長の清水先生からご挨拶がありましたが、お二人からは、これまでの学科、在校生、卒業生とのつながりを受け継ぎ、学科が主体となって、キズナを育んで行きたいという心強いお言葉をいただきました。

また、牧野暢男先生からは、「教育学科の会の歩みについて」、片桐芳雄先生からは、「教育学科の歴史について」お話をいただきました。

教育学科の会は組織の中に卒業生を含めているユニークな会であること、成瀬仁蔵先生の創立時の構想の中に当初から教育学というものがああり、特に大学を生涯学習の機関とするという理念に沿ったものであるという、とても興味深いお話を聴くことができました。



卒業生のリレートークでは、長きにわたり副会長を務められた浦野敬子さん、大森桃子さん、現理事の杉山京子さん、現副会長の櫻井慶子さんから思い出や卒業生理事の話がありました。

このような、貴重な時間を設けていただいた、学科の先生方、会場の設置からおもてなしまで、至れり尽くせりの時間をすごさせていただいて本当にありがとうございました。

会は閉じるけれども、会が創ってきたもの、育んできたものは、会に関わった全ての方の心の中に素晴らしいページとして残り、また新しい若い世代へと受け継がれていくという明るい未来を見ることができました。

散会に寄せて

副会長 櫻井 慶子(29回生)

2年前、私は当時の教育学科の会の副会長の「在学生や若い世代に向けた活動をしたいので参加して欲しい」との言葉に惹かれ、今までの仕事人生で培った様々な繋がりを少しでも後輩の皆さんのお役に立てられればとの思いで理事会入りを致しました。

ところが入った途端、本理事会は先生のお一人と学生委員の一部による、卒業生理事の業務や権限に対する誤解に基づいた、厳しい糾弾を受ける事態となりました。一時は驚きのあまり機能停止状態に陥った本理事会でしたが、私がさらに驚いたのは、当該の先生から次々に送られて来る過激な文面の糾弾メールに大きなショックを受けながらも、実務を担当して来た卒業生理事達が「でもこの部分は本当にそうよね。私も改革したいと思っていた」「これは知らなかったけれど、知った以上は学生さんのために変えてあげたいわね」と、公正に真摯に受け止めていたことでした。その姿に心を打たれて、何とか事態を收拾してこの方達の名誉を回復したいと思ったこと、本会を愛して長年献身的に業務を行って来た古参理事の方の「改革の指揮を取って欲しい」との私への嘆願と涙が、私を現在の立場に向かわせました。

それから怒涛の日々でした。会計とデジタルの2つの分科会を実務担当の理事達で自発的に立ち上げ、経費の徹底的な見直しと、2019年に導入しながらも使いこなせていなかったクラウドシステムを使ったデジタル化を促進して、業務の改革と経費の削減のための取り組みが始まりました。私を含めて仕事を持つ理事

達が多かったために、理事会も分科会も夜にzoomで行われ、その回数は数十回にも上りました。

その後、主たる批判が学科で慣習として行なわれていた学生の入会時の手続きと、会費の徴収方法であったことから、会則を学科とともに見直すことになりました。前述の理事のご子息の弁護士さんがボランティアで法律顧問として加わってくださり、前学科長、年度途中で変わられた前会長ほか数人の先生と、OG理事の代表者を含めたワーキンググループが作られ、会則改正に向けての取り組みが始まりました。前回の葦81号で「次の10年の存続を願って、教育学科の会は変わります」とのコピーと共に、様々な取り組みをご紹介したのはそんな頃でした。

その時に掲げた改革目標のほとんどは達成できましたが、会則や会費などの改正は進まないまま、残念ながら結果として本会は解散となりました。様々なタイミングのずれで、学科も私どもも、それぞれ精一杯の努力をしたのに、お互いにそれが実らなかったのはとても残念なことでした。けれどもこの2年の間、様々な試みの過程で、多くの先生方や会員の皆様に、卒業生理事達の誠実で真摯な仕事ぶりを知っていただけたことは、何よりの「名誉の回復」になったのではないかと、自分を慰めています。

この2年間、たくさんの方々に応援していただき、本当にありがとうございました。教育学科の会は無くなりますが、こうしてできた絆が今後も大切に紡がれて行くことを願ってやみません。

Postcard Corner

会員のひろば

POST BOX

Card.1 「教育学科の会」が解散となりますことは、誠に残念ではございますが、提案理由の諸問題を考えますと致し方ないことと存じます。殊に会費納入会員がこれほど少ないとはあ然といたしました。

(8回生)

Card.2 安保騒動、ネール首相の令嬢インディラ・ガンジー夫人の来校のあった上代学長の折の学生でした。村山先生発案の縦の会、先輩発案の葦と名付けられた会報誌。そして今まで支えてくださった回生の方々、長きに渡りお世話になりました。ただただ、感謝するのみです。人間に関心のある我々卒業生の一人として、今後も細々とですが、社会に関わってまいりたいと思っております。

(11回生)

Card.3 14回生は心身ともに健康な方が少なくなってきました。昔回生委員会に出席するため電車を乗り継ぎ季節を感じながら静かな道を歩いて行ったことが思い出されます。残念ではありますが、時代の流れで解散はやむを得ないと思います。理事の方々が存続のために努力なさってくださっていることを拝察し、感謝申し上げます。

(14回生)

Card.4 世の中の流れとして各方面での「跡継ぎに繋ぐ難しさ」は納得でき、会の解散は致し方ないと思います。

(22回生)

Card.5 「葦」を愛読していましたが、もう発行されないと思うと、つながりがなくなってしまうようで悲しいです。

(24回生)

Card.6 教育学科の会解散、考えもしなかった事態で残念です。講演会や懇話会はその度に学ぶことが多く(葦にも)、学縁の集いで在校生と聞か若い卒業生の活躍は今を生きる皆さんの素晴らしさと教育学科の誇りを感じました。学科の縦糸がブツと切れ、私自身の支柱も折れた思いです。作り上げたものは、いつかなくなる。仕方ありません。

(24回生)

Card.7 現代は良きにつけ悪きにつけ、女性が社会に出て行く時代となり、以前のように社会貢献を大学内に求める必要がなくなったほか、仕事、家事、育児を求められれば時間的な余裕はなくなり、気持ちの上でも学科の会に参加するゆとりはないのが現実でしょう。

(25回生)

Card.8 「解散提案」の今回のお知らせを頂き、大変ショックを受けております。卒業生理事の皆様には長い間ご苦勞をかけたまま、苦渋の決断に至ったという経緯を伺い、申し訳ない気持ちでいっぱいです。一会員として自分は何も貢献できぬまま、また会費納入さえ日常の雑事に紛れて怠ることもありました。悔やむばかりです。社会人として巣立つ出発点となった教育学科の会の存続を願うばかりです。が、紙面にあるような状況を知ると難しさが分かり、残念でなりません。

(27回生)

Card.9 日本女子大学は「卒業させっぱなし」ではなく、学生と卒業生のつながりが創立者の思いであったと伺ったような気がします(昔々の在学時に)。でも桜楓会もありますし、時代もありますね。

(31回生)

Card.10 個人情報保護の今、旧来の形式の会の存続は困難と考えます。同窓生ではなく、大学が主体となり縦のつながりを維持していかないと担当者に負担がかかりすぎるでしょうし、予算も厳しいことでしょう。

(33回生)

Card.11 「葦」を楽しみに、また「葦」から新たに学ぶことも多く、なくなるのは残念ですが…。日本女子大卒というより、教育学科卒、という想いが強かったので…。携わってくださった皆様に感謝です。

(37回生)

Card.12 遠方に住んでおりますので「葦」をお送りくださるたびに懐かしく読ませていただいております。今回のお知らせを大変残念に思います。ここまで教育学科の会を支えてくださった皆様、ありがとうございました。

(38回生)

Card.13 お力になれず申し訳ありません。このようなコミュニティへの関心の低さは、良い方に時代が変わってきていると考えたいものです。

(39回生)

Card.14 いつも会報誌を楽しみに拝見していました。現役の人たちの活動や卒業生のコラムを読むのが大好きです。先生たちも元気かなと思っています。教育現場はますます忙しい日々を送っています。より良い現場になるよう、まずは私たちが、そして将来教育現場に携わる人たちによりよい環境を整えていきたいです。

(60回生)

Card.15 運営がかなり困難で大変な思いをしている中、発行してくれているのを知り感謝の気持ちでいっぱいです。解散は仕方ないですが、これからも卒業生として大学とのつながりを大切にしたいと思っております。

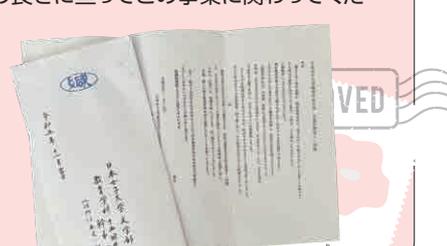
(63回生)

Card.16 今でも教育学科を卒業できたことは自分の誇りです。現在も都内で教員を続けております。

(63回生)

Card.17 時流の波に吞まれるが如くで残念ですが、苦渋の選択を為された理事ご一同様、又、七十年の長きに亘ってこの事業に関わってくださった皆様のご苦勞に対し、心からお労いと、感謝を申し上げます。長い間ありがとうございました。今後、新しい形で教育学科がさらに発展していくことを願っております。

(15回生有志一同)



令和5年度
教育学科の会 理事

会長

田部 俊充 (教育学科教授)

副会長

櫻井 慶子 (29)

研究室委員会

藤田 武志 (教育学科教授)

桑嶋 晋平 (教育学科准教授)

庶務・文書管理担当

松尾 里羽子 (31)

文化・教養担当

清永 奈穂 (院博)

会報編集担当

石井 美奈子 (38)

会計担当

天野 正子 (36)

CRM・情報担当

中川 純子 (38)

監事

杉山 京子 (27)

吉賀 眞理子 (30)

★名前の後の(数字)は回生

編集後記



昨年まで13年間会員部として名簿管理に携わって来ました。手書きでの上書き時代からデジタル化へと進み更に任意加入で卒業生名簿が頂けなくなり、これまで懸命に守ってきた会員名簿が成り立たない時代が来たようです。2022年の春からの流れに時代の変化だと理解はしても、虚しさや心の内に広がりました。振り返れば、個人情報扱いに細心の注意を払いながら時間のかかる作業も後任探しの難しさも、同じように関わってきた理事の方々を支えられ責任感でここまで続けてきた気がいたします。懇話会やセミナー、見学ツアー等も思い出です。お世話になりました多くの皆様に改めて心より感謝申し上げます。

(松尾 里羽子 31回生 庶務・文書管理担当)

今年度の文化部は、先生方や卒業生の皆様の多大なるご協力を頂き、座談会やセミナーなどを4回も開催することができました。今を一生懸命生きる30代の卒業生の座談会、生成AIと教育、発声法、そしてインクルーシブ教育等多岐にわたるテーマでしたが、年齢・経験・生活は違えど精神の底辺に教育学が共通の核とある卒業生・現役生とそして先生方と共に学び合う時間は、私にとってとても刺激的で、時に励まされ、心豊かな時間でした。一年間、私のような者で務まるのだろうかと不安ばかりでしたが、会の活動を通し、卒業生の方々の社会的つながりも持つことができました。これからの私にとって宝となる一年間でした。皆様に心より感謝申し上げます。

(清永 奈穂 院博22卒 文化・教養担当)

「葦」の編集のお手伝いを始めた頃小学生だった二人の息子は結婚し、私はばあばになりました。この間、素晴らしい先生方の講演会に感激し、素敵な先輩方の体験談に勇気をいただき、かわいらしくて元気な後輩方の活躍に刺激を受けました。教育学科の会に参加したことで得られた経験は私の宝物です。皆さま、ありがとうございました。いろいろなツールで瞬時につながることが出来る時代になり、新たな「学縁」が形作られていくことでしょう。創立当時きつと最先端の学びであった母校の、これもまた進化の過程となりますよう期待して「葦」に幕を下ろしたい

と思います。最後まで「葦」の編集にご尽力いただいた会報編集部の星野ひろみさん、佐野加奈子さんにも深く感謝申し上げます。

(石井 美奈子 38回生 会報編集担当)

「教育学科の会は卒業生・在校生・学科を結び架け橋です。HPはこの言葉で始まっています。その言葉通り、教育学科の会はいつも大学と私の心を結び架け橋でした。しかし、教育学科の会の存在が当たり前すぎて、その運営について考えたことはありませんでした。今回、理事として教育学科の会を手伝い、初めてOG理事の方々を支えてくださっていたことを知り、感謝の気持ちでいっぱいになりました。教育学科を卒業し、教員として30数年勤め、これから母校のために何が出来るだろうと思っていた矢先の閉会。感謝を伝えることしかできません。本当にありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願ひします。

(天野 正子 36回生 会計担当)

運営に参加させていただいた直後、学科の会が解散に向けて動き始めました。何かを仕舞うことは容易ではなく、その大変な道のりを歩まれた現理事の皆様、そして、全業務が集中し、それを把握し割り振り、常にお忙しく尽力されていた副会長、本当にお疲れ様でした。また、後継者がみつからず長きにわたる在任くださった理事の方々には感謝の気持ちでいっぱいです。寂しいことではありますが、時代の流れにより会役目を終える時が来たのだと思えます。抗わず時代に沿い変化していくことも大切なことと考えます。会に携わったことで、母校を愛する気持ちに溢れ、卒業生の誇りを持った素敵な先輩理事の方々との出会いに恵まれました。皆様とふれ合う中で、きつとこんな風に、折に触れ、どこかで、縦糸は存在し続けると感じています。

(中川 純子 38回生 CRM・情報担当)

教育学科の会をお手伝して今年で14年、回生委員を2、3年務めるつもりが、これほど長く関わるとはその当時夢にも思いませんでした。昨年度まで庶務部長として主に「葦」や人間研究をお届けする仕事をして参りました。東日本大震災、コロナ感染など日本中が困難な時でも「葦」は発行され、母校の様子や教育学科の会の活動を会員の皆様にお伝えしてきました。少しでも皆様の励みになっておりましたら幸いです。教育学科の会の活動を通して素晴らしい先輩、後輩に巡り合えたことが何よりの宝と思っております。

(杉山 京子 27回生 監事)

私は2019年から監事をお引き受けしています。当初は、1年の最後に作成される決算書に判を押すだけでいいという安易な気持ちでおりましたし、何か問題が起きるなど想像もしていませんでした。引受けて間もなくコロナ禍となったこともあり、思い出のほとんどが、会を閉じるための路線を走っていたことになりました。時代の変化、人の考え方の変化に対応するためにはどうしたらいいかを夜遅くまで真剣に話し合いました。なぜ私がこんなことに巻き込まれなきゃいけないんだろうと、恨んだこともあります。しかし、卒業して45年、今まで無関心だった私が70年に及ぶ会の歴史の1ページに関わったことは、得難い貴重な体験となりました。まさしく生涯学習をさせていただきました。5年間という短い間でしたが、ありがとうございました。

(吉賀 眞理子 30回生 監事)

葦81号の「ボランティアのお願ひ」が目にとまり、退職を機に2023年度にお手伝いご参加しました。今まで知らなかった会の運営や諸先輩のご苦労を、初めて知ることができました。私が何かできたというわけではありませんが、70年の歴史を肌で感じることで素晴らしい先輩方との交流ができたのもとても幸せな時間でした。散会のことでは、高校3年時の私に学科説明会で「ぜひ教育学科にいらっしやい」と声をかけてくださった牧野先生にお会いでき、大変嬉しかったです。卒業後は幼児教育に20余年従事して参りました。教え子の誰かが教育学科で学び、いつの日か教育について語り合うことができることを夢見ています。それも学縁だと思ひながら。

(荻野 美穂子 50回生 理事会ボランティア)

最後の葦に何を書き、この2年の出来事をどのように会員の皆様にお伝えすべきか、ここ数日悩み抜きました。私が教育学科の会の理事会入りしたのは、ちょうど2年前でした。入った直後の何も分からない時に、考えてもいなかった出来事が次々と目の前で起こり、誰かが対処しなければという気持ちで必死に片づけていたら、いつの間にか副会長になり、いつの間にか2年が過ぎていたというのが実感です。辛いこと、悔しいこと、もどかしいことも多々ありました。けれども、素晴らしい教育学科の先輩や後輩に出会い、心にしみる関わりが沢山できたことが、何よりの幸せだと思っております。2年間ありがとうございました。教育学科の会がますますのご発展と、会員の皆様のご健勝を心よりお祈りしております。

(櫻井 慶子 29回生 副会長)

